犬が小便をかけてまわれる距離

4月1日
Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

4月1日のおはなし「犬が小便をかけてまわれる距離」

　お天気がとっても良かったので、朝早くから洗濯機を回してたまっていた洗濯物を片付けて、勢いに乗ってシーツとベッドカバーも洗って干した。窓も天窓も全部開けて、玄関のドアもチェーンロックして半開きにして、台所の換気扇を強にして回して家の中の空気を全部入れ替えた。隅から隅まで掃除機をかけた。掃除機をかけると汗びっしょりになったので、朝っぱらからシャワーを浴びてさっぱりした。

　それだけやってもまだ10時にもならないので、何かやることはないかと庭に出て、お日様を浴びているうちに、休日だしまあいいかというので冷蔵庫から冷えた缶ビールを出してきて、籐製のガーデンチェアにどっしり腰かけてプシュッと開けた。

　どこかから音楽が聞こえてきて、それが聞き覚えのある曲だったのでしばらく耳を傾けた。空はどこまでも澄んで青く、時おりそよぐ風が頬に心地よく、日差しの中でつぼみを付けたバラの紅は生け垣の緑にすっきりと映え、音楽はそんな情景にとても良く合っていた。誰だっけ、クラシックの、19世紀ロシアあたりの……。

　縁の下に置いた炭が喋り出したのはその時のことだった。
　――おくつろぎのところ申し訳ないんですがね。
　わたしはぎょっとして跳ね起きるように身を起こした。いきなり話しかけられてひどく焦ったのだ。シャワーを浴びてからブラもパンティもつけずに部屋着のワンピースを着ただけの姿だったのだから。

　わたしの家の庭は外から見られる心配はないし、誰かが勝手に出入りできるはずもないので油断し切っていた。一人きりの平日の昼間など、たまに何も身に付けずに家事をすることもあるけれど、そんな時はたまにそのままの格好で庭に出ることもある。絶対に誰にも見られないと思っていたからだ。それなのに、いきなり至近距離で声をかけられてとても動揺した。ドアにチェーンロックするのを忘れていたんだろうかと考えながら、あたりを見回した。

　――あの、もうちょい下です。いえ足元ではなく、縁側の沓脱ぎの後ろあたりなんですがね。
　床下に誰かが潜んでいるのかと思って髪の毛が逆立つほどぞっとしたが、言われた場所をじっと見て、喋っているのが炭だとわかってわたしは混乱した。それはバーベキュー用に購入したものの、使う機会がなくダンボールに入れたままの炭だった。

　――ただの炭ですみませんね。いえダジャレじゃなく。どうも奥さん、がっかりされているようなので。
　――がっかり？　がっかりなんかしてないわ。どうしてわたしががっかりしなきゃならないの

？
　――さあ、それはわかりませんが、何だか炭なんかじゃなく、もっと他の人に押し入って来て欲しかったみたいに見えたもんですから。
　――何を……ばかなこと。

　わたしが混乱していた理由のひとつはもちろん、炭が喋っていたからだったけど、もうひとつは炭が喋っているのに自分がそれほど驚いていないことに気づいて、そのことにも混乱していた。まるでわたしは炭が喋ることをとっくの昔に知っていたかのような、そんな感じがしたからだ。

　――なんにせよ、急に声をかけたりして驚かしてすみません。
　――そうよ。びっくりするじゃないの。
　――でもまあ、先に「今度の日曜日に声をかけますよ」ってメールでお知らせするってわけにもいきませんからね。なんせわたし、炭なもんで。スマホも持ってませんし、持ってても使えませんし。

　とても気の利いたジョークでも言ったみたいに、炭はそれからしばらく、へっへっへっへと機嫌良さそうに笑っていたが、それを聞いているうちにわたしはだんだん腹が立ってきた。

　――用があるならさっさと言ってちょうだい。

　滅多に言わないようなきつい調子で言ってしまってから、自分の口調にとげがあることに腹が立ち、腹立たしい気分になっていることにも腹が立ち、ついさっきまであんなに気分が良かったのにと思うとますます腹が立ってきた。

　――まあまあ。わたしが声をかけたのはですね、大変実際的な理由からなんです。あのね、お気づきじゃないかもしれませんが、あたしのいる場所にはですね、良くないものがいましてね、それをこれまであたしが吸収して押さえ込んできたんですよ。

　何を言っているのかさっぱりわからなかった。

　――つまりですね、これは偶然だったんですが、奥さんがあたしを置いたこの場所は、この家にとっての鬼門って言えばいいんですか、弱点って言えばいいんですか、とにかくよろしくないものが出入りする門みたいになっているんですよ。いやこれは偶然じゃないな。きっと奥さんは何かを感じて……。
　――門って何？　霊の通り道みたいなもの？
　――は？　霊の通り道？

炭は素っ頓狂な声を出して復唱したけれど、それからほとんど無作法なまでの大声でげらげら笑い出した。感じが悪い。おかしいことを言ったつもりはないし、炭を笑わせるつもりもない。炭は笑い過ぎて咳き込みながらダンボールの中でじたばたと暴れ、それからやっと話を続けた。

――はい、そういう感じです。霊の通り道！　そんな感じです。とりわけ悪い霊がどんどん出てくる出口と思っていただければいいでしょう。いや、奥さん、うまいこと言いますね。そいつはいいや！　霊の通り道ね。覚えておこう。メモメモ！

バカにされている気がして落ち着かなかったが、炭が言おうとしていることの方がもっと気になった。

――それで？　その通り道がどうかしたの？
――ああそうそう。それでね、あたしのこの吸着能力でもって良からぬものを押さえ込んできたんですがね、いよいよもういけなくなってきました。どうにももうこれ以上は押さえきれないってことです。あたしの吸着能力の限界まで来たわけです。
――どうなるの？　良からぬものが出てきたらどうなるの？
――ちょっと口には出来ないようなとんでもないことが始まります。奥さんだけじゃなくてね、世界中にとんでもないことが始まります。
――とんでもないことって？
――だからそれは口には出来ませんな。
――どうすればいいの？
――そう来なくちゃ！　あのね、いまから与次郎太が来ますから……。
――ヨジロウタ？
――はい。与次郎太が来ますから、やつのやりたいようにさせてやってください。
――ストップストップ！

悪い霊の通り道で霊を封じ込んできた炭の能力が限界に達してそこにいまからヨジロウタがやってくるのでやりたいようにやらせてやる？　全然わからない。わからないことに同意するわけにはいかない。

――ヨジロウタって誰？　っていうか何？
――えっ？　与次郎太が何者か説明するんですかい？　まいったな。そんなこと考えたこともなかった。そうですな。荒っぽく言ってしまうと、与次郎太っていうのはつまり、プロテオン時空における時空連続体の亜系ともいえるし、ヒェリクフラシー学派が唱えるところの非亜系構成要素を束ねる稠密粒子の確率存在ともいえるし、姿は柴犬なんですが……。
――犬なのね。柴犬が来るのね？

――え？　あ？　ああ。そうかそういうことか。そうですそうです。柴犬が今から来るんです。そいつの名前が与次郎太っていうんで。
――それで？　やりたいようにって何？　何をするの？　やりたいようにさせてって言われて、はいそうですかってわけにいかないわ。当たり前でしょう？　うちを滅茶苦茶にされたりしたらたまらない。
――あ。そうですね、でも仮にそうだとしても世界を救えるんですぜ？

世界を救うためだろうが何だろうが、わたしは家を滅茶苦茶になんかしてほしくない。

――大丈夫です、奥さん。そんなことにはなりませんよ。たぶん与次郎太はあたしに小便をかけます。
――なんですって？
――ああ奥さん。そんな風に怒らないでくださいよ奥さん。小便ってのをバカにしちゃいけません。なかなかたいした働きをするんです。あたしの中に吸着した良からぬものたちを消滅させることができるんです。あたしの吸収力を取り戻すことができるんです。何なら奥さん、試しにあたしに小便をかけてみますか？　下穿きもつけておられないみたいだし。
――な！何を。
――ああ、冗談、冗談ですよ。そんなことしたら旦那さんに恨まれちまう。へっへっへっへ。ほんとはね、誰の小便でもいいってもんじゃないんです。与次郎太の小便はそんじょそこらの小便じゃない。あいつぁ、あっちこっちで小便を引っかけて回って結界をつくるんです。良からぬものはその結界線上で力を失うんですな。与次郎太が張った結界の中にいれば何も怖いものはない。あたしらは俗にこれを「犬が小便をかけてまわれる距離」って呼んでるんですがね。

何を言えばいい？　わたしは言葉を失ってしまった。いま聞いたことは何一つ理解できないし、あまりにもとりとめなくて訳がわからなさすぎる。わたしはふと傍らに置いた缶ビールを見つめ、酔っぱらっているんだろうかと考え、それから酔っぱらって眠って夢を見ているんだろうと思い直した。そうか、これは夢なんだ。

その瞬間、どこかから迷い込んだ小さな豆柴がとことこと駆け寄ってきて沓脱ぎ石の後ろのダンボールにさっとおしっこをひっかけて、またとことこと走り去った。あまりにもすばやい一瞬の出来事でそれこそ夢の中で起こったみたいに感じた。でも確かに炭から聞かされていた通りだった。柴犬が現れて、炭に小便をかけて、そして去っていった。

――いまのが、ヨジロウタなの？

けれどももう炭は返事をしてくれなかった。長いこと耳を澄ませていたけれど、聞こえて来るのは、あの聞き覚えのあるクラシック曲だけだった。

（「炭」ordered by キマ沙羅-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

感謝の言葉と、お願い＆お誘い

　Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？　もしも気に入っていただけたならぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブクログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

　「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそこのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

　現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→公開中の作品一覧

　SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「Sudden Fiction Project Guide」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

　ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、Facebookページなどに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

　読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

　10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「急募！お題　この秋Sudden Fiction Project開催します」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！　はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

　こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひご一緒に盛り上がってまいりましょう。

犬が小便をかけてまわれる距離

http://p.booklog.jp/book/47481

著者：hirotakashina
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/47481

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/47481

公開中のSudden Fiction Project作品一覧
http://p.booklog.jp/users/hirotakashina

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.